

ゾンカ語のアスペクト

— Aktionsart 繫辞による述定 —

信 森 廣 光

本稿は、言語類型上、チベット・ビルマ語群に属する現代ゾンカ語を言語素材として取り上げ、普遍文法 (Universal Grammar) の観点から、そのテンス・アスペクトの相関関係が、統語上、如何様に表出されているかを、特にアスペクトの項目に限って、理論的分析を試みることを意図している。

そもそも、アスペクトと呼称される文法カテゴリーは、“スラブ言語学”の領域において盛んに研究されてきた事項であって、その解釈にはスラブ語研究者達の慣例に負うところが大きい。しかしながら、普遍言語 (Language Universals) の考え方に立てば、この概念は、スラブ諸語に限らず、あらゆる言語にも適用されてよいはずである。当然、ゾンカ語の場合に、これを適用してもおかしくはない。しかし、印欧諸語とは本質的に表層形態構造を異にする当該ゾンカ語を同列的に扱うことは無理であるが、深層形式においては、アスペクト表示に相異はないはずである。例えば、スラブ語でのアスペクト表示形式は、原則的に“動詞類”が担っている。それは、動詞に特定の接頭辞を付加する方法と、動詞の語幹語尾に完了語尾を接続させる方法とである。また、英語のようなゲルマン諸語の場合、またはロマンス諸語の場合でも、現代語においては複合時制と呼ばれる形式を取り、助動詞の部分がアスペクト性質を表示する手法を取る。しかるに、総体的に言えることであるが、印欧諸語でも言語変化の過程において現代語では動詞形態による表層表示に替わって、“状況語類”の使用によって代替させる傾向にあることもまた事実である。例えば、スラブ諸語の場合、言語発達の過程を見ると、標準ロシア語は保守的にも表層形態を保っているものの、他の現代南スラブ諸語、即ち、チェコ語、スロバキア語、ソルブ語、ブルガリア語等では、この種のアスペクト形態は徐々に失われつつあるのが現状である。

先ず、アスペクトの概念について、少し考えてみよう。これについて Comrie (1976) は、*Aspect* の中で、スラブ言語学では「特定の意味に対立するもの」と規定し、また、Lyons (1977) の *Semantics* では、「特定の言語構造における文法化された対立」、即ち「継続相、瞬時相、多回相、始動相、完結相などの概念を表示するもの」と定義づけている。しかし、彼のこの後半部の「相」の分類は、動詞という「語」が、本来的に所有する語義文法のレベルであって、私が、ここで検証しようとする統語論としてのアスペクトとは異なるレベルであることを拒わっておく。

アスペクトの性質を意味論的にカテゴリー化すれば、単純に言うと、これは未完了/完了の対立関係であり、「未完了相」は、厳密には非過去という現在時、または未来時をも含むものであり、他方「完了相」は、あくまで過去時の範囲内に留まる。やはり、純粋に言語学的概念からすれば、Lyons の言う「別の種類に対立する1つの種類の状況を示すもの」として未完了アスペクトと完了アスペクトとは明確に区別されるべきであろう。ゾンカ語では、統語形態論的には、これらの対立関係は明示されず、印欧諸語に見られる、いわゆる「屈折」形式はなく、文統語の中でもっぱら Aktionsart の「繫辞類」を添加してアスペクトを言表化する。この意味は、テンスを単純に非過去時と過去時とに2分し、もっぱら、完了アスペクトを過去時に属するものと捉えていることである。当然、ゾンカ語のこれらの繫辞類には、意味的下位分類に関わるものが種々あって、文統語上、重要

*文中のゾンカ語に関する言語資料は、ブータン王立ゾンカ語 (国語) 教育研究所の Jagar Dorji 所長、及びブータン文部庁次官 Lopen Choechoangla 氏よりの提供による。

な機能を果たすのである。そして、これらの繫辞は、同時に各種の小辞と組み合わせさせて、結合関係を生じ、文法的機能と意味的性質を明確にし、表現上のニュアンスの現出に役立たせる。また、以後、この対立関係の表記順を未完了/完了とするのは、チベット・ビルマ語彙の特質として動詞類の語義素が常に非過去にあって、これから、繫辞の添加によって過去が派生されるものと考えの方が適切と思うからである。この意味を厳密に捉えれば、印欧諸語とは異質な構造を持つゾンカ語の構造からして、上記の関係は、相対的対立ではなく、未完了相の下位に完了相が在ることになるが、ここでは「時」ではなく、「相」としてのアスペクトを考えるのであるから、その前提は、あくまで文法的に相互に対立し合うものとして扱いたい。

このように、文法的対立関係において、印欧諸語では、未完了相と完了相の両形式ともが、それぞれが人称、数、性に依りて「屈折」する語形変化を呈示する。一方、ゾンカ語の場合は、屈折による語形変化とは全く異なる体系を持ち、動詞語彙に繫辞の添加・挿入という手段によって、両語形ともが明確に弁別され、特別な形態的・意味的關係を有することになる。その手順として有効なのは、現在時と過去時との関連を検証すれば、そのアスペクトは自ずと非過去時との関連で、未完了相と対照され得る。さらに、アスペクトとモダリティとの関係では、ゾンカ語での、その「叙法性」は、完了形によってではなく、未完了形によって言表化されることに注意すべきであろう。そして、ゾンカ語には純粋な未来時を表出するために、特別な繫辞を用いる特定構文がある。それは、autolalicum構文とも呼ばれ、未完了動詞形と特殊な繫辞の添加による方式であるが、ここではこれを省く。

その他、ゾンカ語には多数の繫辞が在るが、用途に応じて、アスペクトのためだけではなく、テンスの部分を表示するものも多々ある。しかし、これは、ここでは触れない。ただ、純粋にアスペクトの局面だけを取り扱う。完了繫辞は、本動詞の語義素に呼応して、過去時のアスペクトを表し、一方、未完了繫辞は、本動詞の未完了形と共に起して叙法性の意味を担うことが多い。

ここから、詳しくアスペクトの対立における絶対テンスと相対テンスとの関わりについて述べよう。テンスの側から言えば、完了形は絶対テンスに関与するが、未完了形は絶対テンスとは関与しない。この差異について、ゾンカ語の場合、アスペクトの対立は、即、テンスの対立に置き換えることが可能である。伝統文法的な考え方では、直説法の範疇内には、単純テンスとして未完了/完了とが在ることになる。しかし、この対立の意味は、広義に言えば、まさしくアスペクトの概念そのものに他ならない。しかし、自然言語としての現実の言語行動においては、これに特定の時の「指呼」と「叙法性」とが加味されるので、一層複雑となる。それ故、ゾンカ語について、未完了と完了の用語だけによって対立関係を論じることは、必ずしも適切ではないかもしれない。それは、動詞と繫辞の結合関係による完了形が完結する動作、推移する状態などを言表化する故に、包括的な意味では理解できる。しかし、未完了形に対立する完了形とでも、動詞の性質次第では、言表化される移動が完結していないこともしばしばある。しかも移動行為を未完結として言表化するためには、ゾンカ語では、他ならぬ「進行相」が普通は好まれる。つまり、行為そのものが、いまだ進行途次にあって、完結ではないと考えるからである。そして、未完了形は、完結を目的とする行為の移動の無制限連続の繰り返しを言表化する。この場合、いわゆる完了相について唯一言えることは、未完結として含意される未完了性は無制限なもの、継続的なものとして表示される連続体そのものなのである。厳密に言えば、ゾンカ語の場合、未完了と完了との対立は、単なる組合せの違いだけでなく、むしろ両相の対照関係として規定する方が理論的には妥当であるかもしれない。

文統語におけるゾンカ語の完了語句の「指呼点」は、状況語によって、より明確に示されるが、決して「時の幅」の範囲を越えてはいない。つまり、時の幅は、指呼的に規定された表現形式によって言及されるからである。ゾンカ語では、むしろ現在時との関連を強く印象づけさえする。しかし、この事実は、完了動詞句のせいではなく、アスペクトの特性に時の指呼が優先したからに他ならない。これに反して、未完了動詞句の場合には、一層曖昧さが特徴づけられてくる。伝統的な考え方では、未完了は、経過中の期間内の或る時点に起こるか、乃至はまだ起こっていない行為を示すものと言われている。未完了が漠然と未来性を示し得ることは理解できても、経過中の時の指呼の解釈の点ではそれほど明確ではない。この場合の意味は、未完了と言うよりは、どちらかと言えば、動詞句の形容詞化と考えた方が説明し易い。特に、行為の習慣性の解釈や、未完了性を包含する総称的叙述にはこの方がむしろふさわしい。習慣性や継続性は、いわば、繰り返しの連続のことであり、経過中を表す特徴的な形態として十分に理解できるものである。また、未完了は、発話時と同時に行為が起きるときにも、勿論、有効であることは言うまでもない。

ここで再び、Comrie (1976)の意見は有効である。彼は、完了について、「行為が完結したということは、状況の終結ということに強調を置き、完了形それ自体の使用そのものは重大ではなく、むしろ、その状況の一部分よりも、状況の部分が全体として示されることである」と言う。しかし、ゾンカ語の場合、完了語句はアスペクト性と同時に過去テンスの意味合いを強く帯びているので、挿入される時を規定する状況語の性質次第では意味的に非文となりかねない。例えば、完了形に「今」を埋め込んだ場合、今現在、言及されても、その期間内で時の瞬間に言及されるのであるから、「今は」、発話時には、もう既に過去時となったことを意味する。つまり、完了動詞句によって言表化された移動は、次の瞬間には、もう既に起こってしまっていた訳である。

ここで、もう少し、完了が過去テンスと関わる特性について述べよう。特に、完了形によって言表化された移動の終結に関与する過去時に完結した時点について考えよう。完結という移動行為には時の幅があって、大まかにこの幅は、さらに、始動、中途、終結の3段階に区分できる。勿論、「移動」の概念は、それ自体意味的には複雑なものであるから、移動の過程を辿る行為者の意図を表す文意との関連で解釈されねばならない。Comrieの言う如く、完了だからと言って、決して状況の継続の表現とも共起できぬことはないのである。問題点は、完了形によって言表化された状況が、常に分析可能であることを意味していないことである。従って、完了形とて、必ずしも局面の状況を正確に言表化しているとは言い難い。殊に人物主語が行為したという状況は、当然、完了動詞句によって表出されるべきものであるが、従属節内の完了動詞句によって言表化される状況とは直接的な関係は全くないからである。

また、ゾンカ語には、ただ完了の意味しか持たぬ、いわゆる完了動詞が実在するが、これは、アスペクトの繫辞とは異なる性質を有しているので、別個に、語源的・通時的に研究されるべき事項である。

II

アスペクトの理論的根拠については、上述した通りであるが、これから、ゾンカ語のアスペクトの様態について具体的に検証する。完了アスペクトは、過去時における或る行為や或る状態が完了したか、或いは終結されるかの結果を視点とした出来事や移動を統語的に表現する言語形式の一つであった。この統語上の文法関係をゾンカ語に当てはめると、そこには独自の言語体系による様々な表出方式があることが分かる。その述定を成立させるために、その方式を大別すると、先ず、①Aktionsartの繫辞を用いて完了アスペクトを表現する手段と、②完了動詞自体で完了性を表示する形態とがある。それぞれを挙げれば、次のようになる。

①繫辞類=so, song, či, da (མོ་སོང་ཅིག་དུ་)

②完了動詞=tshā (ཇ)

などである。

これらの繫辞類は、本動詞の直後に配列されて出現し、本動詞の語義的意味の完了・終結を示す。しかも、繫辞そのものが単独で出現することは少なく、絶えず過去テンスを表示する小辞と組み合わせられて用いられるのが普通である。さらに、これらを下位分類すれば、文中の本動詞の性質に応じて、添加する繫辞の性質が決まることである。その基準は大きく自動詞と他動詞と、それぞれに呼応するものとに分けられる。次の通りである。

①自動詞と結合するもの=so, song, či, 前綴辞 yā (མོ་སོང་ཅིག་ཡུ་)

②他動詞に後綴するもの=da(ད)

などが見られる。

また、完了動詞の使用も頻繁で、完了性の表出を明確にさせる直接的方法として有効である。最もよく用いられる語彙は、次のものである。

① tshā (ཇ)「完了する」

② dö (དོ)「～の状態にある」

などである。

ここで、上記の繫辞類を各々、詳細に例証していく。

この繫辞 so (ས) は、もともと本動詞 jo (འཇོ)「来る」の過去形 song (སང)「来た」の短形で、本来の語義を転化して準動詞化した語彙として行為の完了性を表出する。この際、結び付く本動詞は必ず自動詞でなければならぬ。以下文例を挙げる。

① ངགི་ཁེན་ཇི་ལྷ་ཀྱི་འངས་སོ་རུག།

Nga-gi khenja-di ču-gi bang so nu.
 私の シャツ(冠) 水(能) 濡れる(完了) (推断過去テンス・マーカー)
 【私のシャツは、水で濡れてしまった。】

② དེ་ཚུ་མ་ལོ་ལོ།

Peča ta tsho so yi ga?
 勉強 出来上る (完了) (目撃過去テンス・マーカー) (疑問)
 【勉強は、まだ出来上がっていないのか?】 (勉強は、もう済ませたのか、の意)

③ ཁྱོད་དུས་ཚོ་ད་ལུ་མ་འོང་བ་ཅིང་ཀྱི་ཁྱོད་ལུ་ཀྱི་འཕྲིན་ལྷོ་མི་འབྲིན།

Čö dutsho-lu ma ong bačin nga-gi čö-lu kitap mi-bjin.
 君 時間 (与) (否定) 来る (条件) 私 (能) 君(与) 本 (否定) 与える
 【もし君が時間通りに来なければ、私は君に本を上げない。】

④ ད་རི་དང་ལྷ་ས་མེ་ཀྱི་གང་སོ་རུག།

Dari dau nyagang so- nu.
 今日 月 一杯になる ~になった (完) (推断過去テンス・マーカー)
 【今日、月は満月となった。】

上記④文における完了アスペクト so (ས) と推断過去テンス・マーカー -nu (རུག) との組合せの意味は、次の事実によって説明できる。即ち、話者の立場から言えば、いつ、どの時点で「月」が満月になったかを観察していなかったからで、結果的に見たときには、もう既に「満月」になっていたのをたまたま目撃したにすぎないからである。つまり、「月」の形状の変化には、そもそも決まったプロセスがあって、約2週間という時の経過中、いわば「時の幅」の間に起こるものである。従って、話者が目撃した時点とは少しも関係がない。

次に、so (ས) の長形 song (སང) について見よう。この song (སང)「行った」は、前述したように本動詞として用いられる他に、完了アスペクトの繫辞としても機能する。同時に「~になった」という両方の意味を兼ねる場合が多いことにも注意すべきである。この際、しばしば前綴辞 yā (ཡ་) と結合する場合が多い。以下、文例を挙げる。

⑤ ཁོ་ཉི་མང་ཉིད་ཉི་ལོ་དུས་ད་རི་དེ་མེད་ཡན་སོ་ལོ།

Kho hema nganyni yö sa dare dajemep yā-song- yi.
 彼は 良い 以前に ~である しかし 今 無能な (完了)~になる (目撃過去テンス・マーカー)

【彼は万能であったが、今や彼は駄目になった】

ཁོ་གཉི་ཡན་སོ་ལོ། ཁོ་ཡན་ལུ་ཡན་སོ་ལོ།

⑥

Kho gati ya-som? Kho Japan-lu yā-song- yi.
 彼 どこ (完了) 行った 彼 日本(処) (完了) 行った (目撃過去テンス・マーカー)
 【彼は、どこへ行ったの? 彼は日本へ行ってしまった。】

動詞 ong (འོང)「来る」の完了Aspectは、やはり同音の ong (འོང) によって表示される。しかし、現在テンスで用いられる場合とは異なり、完了Aspectでは常に本動詞の語幹と結合した形態で現れる。これは、ong (འོང) が、派生のための基底語として、もはや完全に一般語彙化したことを意味する。例えば、下記文例中の語彙 ong (འོང) は thöng (ཐོང) へと語頭子音の添加によって派生語彙化されたことを意味する。即ち、Kho thöng ong-yi (མ་ཐོང་འོང་ཡི།)「彼は来ていた」の thöng (ཐོང) は「来る」の意であり、この場合の ong (འོང) は完了のAktionsartの役目をしている。

さらに、自動詞と結合する繫辞 či (ཅི) があり、これよりもさらに保守的な綴字 či (མཚོན) の語形もある。これは、もっぱら自動詞だけと共に用いられ、狭義の完了Aspectを表すのを特徴とする。その語用は、特に“感動、興奮、感情”などを表すAktionsartの知覚動詞に限られ、もっぱら完了Aspectを表す。

⑦ འུ་བུ་ཅི་ཡི།

Nga wodhu či- yi.
私 疲れる (完了) (目撃過去テンス・マーカー)
【私は疲れてしまった。】

⑧ ད་རི་ཚེ་མ་ནང་དྲོམ་དེ་ཅི་ཡི།

Dari tsemanang dhom dren či- yi.
今日 森(処) 熊 会う (完了) (目撃過去テンス・マーカー)
【今日、私は森の中で熊に出会った。】

⑨ ཁོ་ལོཔ་དང་འགྲོ་བའི་དུས་ལ་ཅི་ཡི།

Kho lopda-nang jo remda doroya 'üp či- nu.
彼 学校(処) 行く 時間 再び 隠れる (完了) (推断過去テンス・マーカー)
【時間になったのに、彼はまたどこかに隠れてしまった。】

前述した完了繫辞としての song (སང) に再び戻ろう。これには、小辞 bä/wä (པ་/འོ་) と接続する特別な用法があって、文意を確実に表現するのに役立つ。この bä/wä (པ་/འོ་) は、「得た知識や情報」を伝える機能を持つ小辞で、この接続によって文統語において「必ず有りうる」、「可能な」の意味を帯びようになる。

⑩ ཡར་སང་སང་པ་འོང།

Kho yā- song bä- song.
彼 (完了) 行った 知る (完了)
【彼はもう行ったはずだ。】

པ་རོ་ལུ་འགྲོ་བའི་ཡར་སང་སང་པ་འོང།

Paro-lu jo mi busu yā song bä- song.
パロ(与) 行く ~で バス (完了) 知る (完了)
【パロ行のバスは、もう出てしまったかもしれぬ。】

⑪ ད་ལྟ་ལྟེན་ལ་ཅི་ཡི།

Dato lam zimču-na zhū yō bä song.
今 僧 住居(処) 坐る(敬語) ~にいる 知る (完了)
【お坊さんは今、家に居るかもしれぬ。】 (敬語表現)

⑫ ཁོང་ཚོ་ལ་ཚོམ་དེ་ཅི་ཡི།

Khong zom-di be dö- wä song.
彼ら 会議(冠) ~する (進行相) 知る (完了)
【彼らは会議中かもしれぬ。】

次に、他動詞と共に、最も頻繁に使用される完了繫辞 da (ㄋ) について述べる。ゾンカ語では、他動詞の完了を表すためには殆どこの da (ㄋ) を用いる。これにも、より保守的な綴字 da (ㄋ (ㄋㄱ)) の語形もあるが、現代の発音上には相異はない。その機能は、原則的に他動詞の完了アスペクトを表すが、特例的に若干の自動詞にも適用される場合があることに注意すべきである。この事実は、往々にして、動詞自体の語義素に起因することで、これには他動詞、自動詞双方の特質を持つ語彙の場合が多い。しかし、ゾンカ語ではその性質のディマーケーションは、それほど明確ではない。以下の文例で他動詞、自動詞を比べる。

⑬ གོ་ཅུ་ཤི་གུམ་ཡར་སྤོང་དུག།

Gočuše drum song- nu.

窓ガラス 壊れる (完了) (推断過去テンス・マーカー)

【窓ガラスが割れてしまった。】(自動詞)

⑭ ག་རི་གྱི་ཤི་དགུམ་ད་དུག།

Gari-gi še trum tang da- nu.

自動車(属) ガラス 壊す 出す (完了) (推断過去テンス・マーカー)

【自動車の窓ガラスを壊してしまった。】(他動詞)

上文に見られる如く、完了繫辞 da (ㄋ) と tang (ㄋㄱ) 「出す」とも、語源的には同族関係にあるが、現代ゾンカ語では、その語義的意味は全く別であって、混同すべきではない。このように、ゾンカ語では、各種の繫辞の中でもこの da (ㄋ) が完了性を最も適確に表出する故に、一般に好まれ、しばしば用いられるものである。

前出の tang (ㄋㄱ) との組合せによって複合語彙化した文例を下記に挙げよう。

⑮ ཚང་ནི་དེ་མི་འདྲོང་དགོ་པམ།

Čanghey-di me-tang go- bā

ゴミ(冠) 火 付ける《焼く》 ~ねばならぬ 知る

【我々はゴミを焼かねばならぬ。】(現在テンス)

⑯ ཇི་གྱི་དངུལ་གྱི་དེ་ཙམ་ཚུ་གྱི་སྤྱོད་འཕགས་དུག།

Nyi-gi nulku-di amtsu-gi ba- zha da- nu.

私の(属) 財布(冠) 妻(能) 隠す 置く(完了) (推断過去テンス・マーカー)

【私の妻は、私の財布を隠してしまった。】

⑰ ཁ་ཅི་ལམ་ཚོགས་ཀྱི་མཇུག་འབྲུག་ད་དུག།

Daci-lā khatsāle čoku judu da- nu.

前(奪) 昨日 儀式 終わる (完了) (推断過去テンス・マーカー)

【儀式は、もう昨日に既に終わっていたようだ。】

⑱ ཨ་ལུ་གྱི་ཚམ་འདྲོ་ད་ཡི།

Da alu-gi tshom- di bo da- yi

今 子供(能) カレー(冠) こぼす(完了) (目撃過去・テンス・マーカー)

【子供が今、カレーをこぼしてしまった。】

ここで興味あることは、完了繫辞 da (ㄋ) の性質が、他の繫辞類とはいささか違っていることで、da (ㄋ) 自体が屈折変化の特徴を有している事実である。以下、その様態を見よう。第一は、⑬文の如く、「蓋然

性」を表示するモーダル動詞 *drä* (འདྲ་ལོག་པ་) と組み合わせる場合で、この直前に *da* (ད་) が位置するとき、この *da* (ད་) の方が語末に屈折変化を起こし、*dam* (དམ་) の語形となる。英語の場合は、モーダル動詞との組合せでは、本動詞は屈折せず、モーダル動詞が屈折変化を起こすのとは全く対照的であって、言語学的に面白い事象である。しかも、ゾンカ語では、この屈折形式は、全く文法規則に適合した変化形である。しかし、第二に、*dap* (དཔ་) の語形を示す場合は、あくまでこれは *da* (ད་) の屈折代替形にすぎない。例えば、*gäci be dap 'mo* (གཅི་འཁོར་དཔ་མོ།) の語句では、現代ゾンカ語の意味は、先行の文が目下、進行中であるという通時的プロセスを示している。

⑱ ཀམ་གཞི་ལོག་པ་ཉམ་པ་འདྲ་ལོག་པ་ལྟོག་པ་

Kho gelong-na-lä thöng tang dam- drä, me- na?
 彼 僧侶 社会(奪) 行く 出る (完了) (モーダル)《潜在性》(否定)(疑問)

【彼は、僧侶の社会か^引追い出されてしまったようだ。】

この他にも、この完了繫辞 *da* (ད་) の語用範囲は広く、種々の組合せがある。殊に、小辞 *ba* (པ་) との結合は、可文として、よく好まれる構文を成す。この *ba* (པ་) は、本来、*spinum* 形成の小辞として機能するが、語源的には小辞 *bä* (པེ) と同族関係にあって、“確実、確信、保証”などの特別なニュアンスを文に与える。下記の⑳文と㉑文で見られる如く、厳格な“命令、指図”ではなくて、より婉曲的な“指示”という表現に適している。この形式は *adhortativum* タイプと言うべきであろう。

⑳ ཅ་དུག་དེ་མ་ཚུ་རུ་འདྲམ་པ་སྐྱུང་པ་དཔ།

Ča-di dari be- ma tshā-ru, nāba be da- ba.
 準備(冠) 今日 ~する (否定) 終える 明日 ~する (完了)(*spinum*)

【たとえば、今日、準備が出来なくても、明日は済ませよう。】

㉑ ཁེ་མེ་ཉམ་པ་ཅ་ཉམ་པ་ལྟོག་པ་

Khe me. nga tingle tshā da- ba.
 違い ~ない 私 未来に 作る (完了)(*spinum*)

【構わないよ。次は頑張ろうよ。】

また、下記の㉒文と㉓文から判明する如く、完了繫辞 *da* (ད་) の性質は、厳密に言えば、「1つの状況から別の状況への完全なる推移」を表すことが明瞭になる。この事実を例証するために下記の文例を比較してみる。行為動詞 *nyä* (ཉམ་)「眠りに入る」と状態動詞 *nyilo* (གཉིད་ལོག་)「眠っている」との間の意味上の相異は歴然としている。つまり、㉒文と㉓文での本質的な差異は、一方がテンス、他方がアスペクトに重点があるという違いに容易に気づくであろう。

㉒ ཉམ་ཉམ་པ་ལོག་པ་ལྟོག་པ།

Tandin nyä long da- nu.
 タンディン 眠り 起きる (完了) (推断過去テンス・マーカー)

【タンディン(人名)は、今、起きている。】(目覚めて起き上った。)

㉓ ཉམ་ཉམ་པ་ཉམ་པ་ལྟོག་པ།

Tandin nyilo tsho do- wä.
 タンディン 眠り 目覚める (完了) (推断過去テンス・マーカー)

【タンディンは、今、目が覚めた。】(まだ起き上ってはいない。)

次いで、状態動詞の中でも、使用頻度の高い dö (ཇྲ) に注目してみよう。この dö (ཇྲ) 「～の状態にある」は、基本的には、本動詞として使用されるが、同時に、語義転化して、「継続性」を示す繋辞としての役割も果たす故に重要な語彙である。そして、「何かを為し続ける」、「何かを為そうと意図する」という思いを表現する。言い換えれば、これも「遂行」の Aktionsart を表出する繋辞である。

㉔ འཏར་མ་བེ་སེ་དེ་རཱ་བེ་དོ་ཤེ་མམ།

Atara ma be seme di ra be döp- mā
 常に (否定) ～する 善 (冠) (強調) ～する 続ける (現在) 《知覚》
 【君は、いつも、してはいけないことをしている。】《現在テンス》

以上、現代ゾンカ語で適用されるAktionsart繋辞類のすべてを述べてきた。ここからは、完了動詞が示す完了アスペクトの論題に移ろう。

ゾンカ語には、前述した如く、完了アスペクトを表出するために、繋辞の他に、完了動詞を直接使用する手段がある。その典型として完了動詞 tshā (ཇར) 「完了する」を挙げよう。これは、行為の「完結」や状態の「終結」を示すAktionsartの一種と見做すことができる。文統語内ではその意味機能は、当然ながら、この動詞が固有する「或る行為が完全に終結した」ことを表示する。この意味をより明確にするためには、既出の繋辞 da (ཏ) とこの完了動詞とを対照してみることが最も適当であろう。例えば、da (ཏ) を含む語句、za-da-yi (ཏཇཱལྱི) 「私は食べた」の文意は話者が料理そのものを食べたことを示す。一方、tshā (ཇར) を使う語句、za-tshā-yi (ཏཇརལྱི) 「私は食べ終わった」は、話者が食事そのものを終了したことを伝える。つまり、前者は、料理は食べたが、まだ食べる行為は継続できることを意味するが、一方、後者は食事をする行為そのものを終結したことを表現している。このことから明白なように、もし話者が、これ以上の食事を拒む際には、その口実として、後者の表現を用いる方がより好ましい。

㉕ ང་ཏཇཱལྱི་འགྱུ་གཅིག་གྱི་ནང་ཁྱོད་ལུ་ཁྱིམ་རྒྱུ་ཚར་ལྱི།

Ngace- gi dau- ci- na- ra khö-lu čim kap tshā- yi.
 私達 (能) 月 1つ (処) (強調) 作成(与) 家 置く 完了する (目撃過去テンス・マーカー)
 【私達は、1カ月で、家を建ててしまった。】

㉖ མང་ཤོམ་གྱི་དོན་ལུ་ཅང་མོན་ཏཱ་ཚར་ལྱི།

Da sangphe- gi dön- lu čangsön gara tap tshā- yi.
 今 来年 (属) ～のために(与) 苗 すべて ～する 完了する (目撃過去テンス・マーカー)
 【今、来年のために、米の種を蒔いて、全部完了した。】

さらに、この完了動詞 tshā- (ཇར) が、モーダル動詞と組み合わせることもしばしばある。特に、「可能性」を示すモーダル動詞 ong (འང) 「～できる」との連結が顕著である。因に、この句形式は、英語の未来完了に相当する。

㉗ ཁྱོད་པཱེ་ལམ་ལོག་རྗེས་ཁྱོད་ལུ་ང་གྱི་ཁྱོ་འཇར་ཚར་འོང།

Čö baza- lä lok- hö- hö nga-gi to be tshā- ong..
 君 バザール (奪) 後ろに 着く着く《帰る》私 (能) 食事 ～する 完了する (モーダル) 《可能性》

ཁྱོད་ལམ་རྒྱུ་མི་ཉི་རུ་ལྱི་འགྱུ་མེ་ལྱི་ཁྱེ་འཇར་ལོག་རྗེས་ཁྱོད་འོང།

Delä čö- ra ki-mi tiru-di nga-di šuma-gi dau-na lok ci trö ong.
 それから 君(強調) 借りる お金(冠) 私 次の(属) 月(処) 後ろに (近接) 返す (モーダル) 《可能性》
 【君が市場から戻って来るまでには、私はこの料理を作り終ってしまっただろう。
 それから、私が君から借りたお金は、来月に返そう。】

最後に、もっぱら過去テンスにのみ使用される完了繫辞 *ci* (ཅི།) の語彙がある。この意味機能は、「近接過去時」を示し、形式上は、下記㉔文の如く、必ず本動詞の屈折形に接続される。そして、その意は、「～したばかり」、「～するや否や」で、行為や状態の推移完了を記述する。文構成要素としての、この *ci* (ཅི།) は、語源的には、数詞 *ci* (ཅི།) (1つ) と同族関係にあった成分であるが、意味派生の結果、名詞類構成要素の性質を持つようになった経緯がある。統語上、*ci* (ཅི།) によって統率される句や文は、現代ゾンカ語では、主節文全体を限定する役割を持ち、「潜在的可能性」を示す未来完了テンスの場合は勿論のこと、他のどのテンスの場合にも適用され得る、まことに便利な素性を持つ繫辞なのである。

㉔ མི་ཚེ་ཉམ་སྒྲུབ་ཅི་ངལ་ཤོད་པོ།

Miča nam hōp ci nga phä thōng- ong.
 皆 集まる 着く ～や否や 私 そこへ 来る (モーダル)《可能性》

【全員が集まるや否や、私もそこへ行こう。】

これ迄、ゾンカ語のAktionsartの繫辞類が、文統語の中で、完了Aspectを表示する役割について詳述してきた。その結果として、その働きの展開が、繫辞と小辞と動詞との理に叶った組合せによって広がり、意味の弁別によってAspectの階層が決まるという事実が明らかになった。そして、動詞が形容詞化へと転化することによって、Aktionsartの繫辞が派生した事象をも見てきた。しかし、繫辞の性質上、そこには自ずと制約があって、動詞の性質如何によっては、分節的に交替可能なものと不可能なものが実在することも判明した。また、変種形の場合、自立的に場所的連辞の役割を持つものもあったが、基本的には、繫辞は非自立性なるが故に、単独で出現する場合はごく限られていた。これらは、あくまで非自立性の繫辞であるから、決して単一では文中に登場できないし、常に、本動詞の直後、或いは前後に密着して共起できるものであった。しかも、音声上、決してストレス・アクセントを持つこともなく、また、前置の動詞のアクセントに影響されることもない。実際に発声される場合にも、むしろ共起する前置の動詞と合体・融合して発音されるという特色がある。

このように、完了Aspectが完了語句でのみ実現し得るという配列上の順序性はあるが、特別な完了動詞の語彙との場合には、たとえ、これが本動詞として完了繫辞を求めても許容されぬ場合もあることに注意せねばならない。

再び、別の角度から焦点を当ててみると、言表化のための相関作用の特質は、次のように特定できよう。これらAktionsartの繫辞が言表化する移動の制約的性質は、同時に、無制限連続の反復と重なり合うということである。もし、完了Aspectが根源的に所有する制限的習慣性の特質とは対照的に、逆に、無制限的習慣性の意味を完了性に付与しようとすれば、この重なり合う事象も止むを得ない。このときの完了化の意味は、発話時と同時に、既に「相」として捉えていることにある。この意味では、完了相における動詞の形容詞化という言語学理論の局面からも重要な課題を提起するのである。形容詞化という視点からすれば、完了Aspectは、既に完結した行為を実際に起こった間に発話行為が実施されたことを示唆していることになる。

以上、検討してきたことは、ゾンカ語のAktionsart繫辞類が所有するAspectの実体性を、その対立の構図、その相関作用の整合性、同時にその限界範囲について実証することであった。しかし、この問題は、自然言語を対象とするが故に、依然として複雑な要因を抱えていることは否めない。その理由は、動詞ととも、これらAktionsartに該当するような形容詞化形を持ち得るものと、持ち得ぬものとの差異にある。それは、統語構造の表層形態だけでは判別し難く、さらに意味部門の深層構造の解明へと立ち入らねば明確な解決は得られない。ここに、自然言語の研究の困難さと尽きぬ面白さがあるのである。

(1994年10月31日)

References

- (1) Driem, G. van (1992): རྫོང་ཁའི་བརྗེ་བྱེད་པའི་གཞུང་གི་ཐོམ་ཚུགས།
དཔལ་ལྷན་འབྲུག་གཞུང་གི་རྫོང་ཁ་གོང་འཕེལ་ལྷན་ཚོགས།
- (2) Dorji, S. (1990): རྫོང་ཁ་རབ་གསལ་ལམ་བཟང་གི་ཐོམ་ཚུགས།
དཔལ་ལྷན་འབྲུག་གཞུང་གི་རྫོང་ཁ་གོང་འཕེལ་ལྷན་ཚོགས།
- (3) རྩིས་ལྷན་རྒྱུ་རྩེ་ཆེ་མོང་(1990): རྫོང་ཁ་བརྗེ་བྱེད་པའི་གསལ་པ་གི་ཐོམ་ཚུགས།
རྫོང་ཁ་གོང་འཕེལ་ལྷན་ཚོགས།
- (4) Comrie, B. (1976): *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (5) ———. (1985): *Tense*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (6) Lyons, J. (1977): *Semantics, I, II*, 2 vols., Cambridge: Cambridge University Press.
- (7) Dahl, Ö. (1985): *Tense and Aspect Systems*, Oxford: Basil Blackwell.
- (8) Goldstein, M. C. (1991): *Essentials of Modern Literary Tibetan*, Berkeley: University of California Press.
- (9) Roca, I. M. (ed.) (1992) : *Thematic Structures*, Dordrecht: Foris.
- (10) Schwall, U. (1991) : *Aspektualität*, Tübingen: Gunter Narr.
- (11) Thelin, N. B. (ed.) (1990) : *Verbal Aspect in Discourse*, Amsterdam: J. Benjamins.
- (12) Curat, H. (1991) : *Morphologie verbale et reference temporelle en français moderne*, Genève: Librairie Droz.
- (13) Heinemann, W. U. & Viehweger, D. (1991) : *Textlinguistik*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- (14) Chambreuil, M. et Pariente, J-C. (1990) : *Langue naturelle et logique*, Bern: Pinter Lang.
- (15) Abraham, W. (ed.) (1991) : *Discourse Particles*, Amsterdam: J. Benjamins.
- (16) Fleischman, S. & Waugh, L. (1991) : *Discourse-Pragmatics and the Verb*, London: Routledge.
- (17) Speas, M. (1990) : *Phrase Structure in Natural Language*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- (18) Stolt, B. (1990) : *Textgestaltung-Textverständnis*, Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- (19) Andrews, E. (1990) : *Markedness Theory*, Durham, N. Carolina: Duke University Press.
- (20) Grimshaw, J. (1990) : *Argument Structure*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (21) Heine, B., Claudi, U. & Hunnemeyer (1991) : *Grammaticalization*, Chicago: University of Chicago Press.
- (22) Lefebure, C. (ed.) (1991) : *Serial Verb*, Amesteram: J. Benjamins.
- (23) Kunig, E. (1991) : *The Meaning of Focus Particles*, London: Routledge.
- (24) Altmann, G. T. M. (ed.) (1990) : *Cognitive Models of Speech Processing*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (25) Ouhalla, J.(1991): *Functional Categories and Parametric Variation*, London, Routledge.
- (26) Rizzi, L. (1990) : *Relativized Minimality*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (27) Sadock, J. M. (1991): *Autolexical Syntax*, Chicago: University of Chicago Press.
- (28) Spencer, A.(1991): *Morphological Theory*, Oxford: Basil Blackwell.
- (29) Bhat, D. N. S.(1991): *Grammatical Relations*, London: Routledge.
- (30) Dale, R.(1992): *Generating Referring Expressions*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (31) Carberry, S.(1992): *Plan Recognition in Natural Language Dialogue*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (32) Anderson, S. R. (1992): *A-Morphous Morphology*, Cambridge: Cambridge University Press.